

Title	ヒューム外的物体論と公共的世界の成立：デカルトを手がかりに
Sub Title	Hume's theory of the external body and the formation of the public world : in reference to Descartes
Author	矢嶋, 直規(Yajima, Naoki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.116 (2006. 3) ,p.89- 116
JaLC DOI	
Abstract	The Cartesian problem of the external world characterises modern philosophy. Hume tackles this problem in his attempt to establish a new "science of man". Hume's theory of the external body is generally recognised as a sceptical argument; commentators seldom interpret it as a moral theory, nor do they usually find any significant connection between the theory of the external body and the theory of normativity. In this paper, I indicate Hume's theory of the external body as a systematic theory of perceptions which completes the development of perceptions from general ideas to the belief in causation. I then show that the "general point of view" is the principle which underlies this development, which proves to be evidence that there is a parallelism between Hume's epistemology and his moral theory. Hume founds the perception of normativity on the perception of the external body that is defined as the public perception. Thus, perception of the external object culminates in the creation of the system of morality. Unlike the Cartesian concept of the external world as a requirement of reason, Hume's external body constitutes the public world. I argue that Hume's theory replaces the Cartesian scientific view with a moral view as a reliable foundation of human life.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000116-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

ヒューム外的物体論と 公共的世界の成立

——デカルトを手がかりに——

— 矢 嶋 直 規* —

Hume's Theory of the External Body and the Formation of the Public World: In Reference to Descartes

Naoki Yajima

The Cartesian problem of the external world characterises modern philosophy. Hume tackles this problem in his attempt to establish a new “science of man”. Hume’s theory of the external body is generally recognised as a sceptical argument; commentators seldom interpret it as a moral theory, nor do they usually find any significant connection between the theory of the external body and the theory of normativity. In this paper, I indicate Hume’s theory of the external body as a systematic theory of perceptions which completes the development of perceptions from general ideas to the belief in causation. I then show that the “general point of view” is the principle which underlies this development, which proves to be evidence that there is a parallelism between Hume’s epistemology and his moral theory. Hume founds the perception of normativity on the perception of the external body that is defined as the public perception. Thus, perception of the external object culminates in the creation of the system of morality. Unlike the Cartesian concept of the external world as a requirement of reason, Hume’s external body constitutes the public world. I argue that Hume’s theory replaces the Cartesian scientific view with a moral view as a reliable foundation of human life.

* 敬和学園大学人文学部助教授

はじめに

外界存在をめぐる議論は、近代哲学を特徴づける主題である。ヒュームは『人間的自然論』(1739-1740)¹⁾においてデカルトに始まる外界存在の問題に取り組んでいる。外的存在をめぐる問題は『人間的自然論』の理論体系全体に関連しているといえるが、その主要な議論は第一巻第四部第七節「感覚についての懐疑論について」において展開されている。それゆえ、これまでヒュームの外的存在論は主として懐疑論との関連において読まれてきた。それに対して本稿は、ヒュームの外的存在論の持つ自然主義的道德論としての意義を解明しようとするものである。ヒュームの外的物体論は多くの論者によって極めて難解な議論とされてきた。その要因は、ヒュームが外的物体論において同時に複数の課題に取り組んでいることにある。またさらには、彼以前の哲学を批判し、その批判によって自身の主張を浮き彫りにしようとするヒュームの議論の方法にあるともいえよう。しかしヒュームの外的存在論が何を最終的な議論の狙いとしているのかを知ることは難しいことではない。なぜならばヒュームはそれを『人間的自然論』の全体で誤解の余地なく明らかにしているからである。それは道徳性としての人間的世界の成立を人間的自然に即して解き明かすことであるといえる。『人間的自然論』のすべての議論は何よりもこの目的のために存在する。それゆえ私は本稿において、ヒュームが最終的に達成しようとする課題に照らして彼の外的物体論の意義を論じたい。

ヒュームの外的物体論は二つの哲学的課題が交錯する地点に成り立つ論考と見なすことができる。一つは、デカルトが提示した外界存在の議論に対して、ロックおよびバークリとは異なる独自の立場を表明することである。そしてもう一つは、印象と観念に始まる『人間的自然論』第一巻における知覚の理論を一つの結末へと導き、道德論の認識論的基礎を確立することである。本論において私はヒュームの外的物体論を公共的世界の成立

を示す議論として跡づけ、ヒュームの認識論が自然主義的道德論として読解可能であることを明確にしたい。

1. ヒュームのコギト批判

本節では、ヒュームの外的物体論に内在するデカルト批判の含意を議論し、ヒュームの独自性のありかを探りたい。デカルトは、方法的懐疑によってすべての存在を疑ったのち、思惟する精神を確実な存在として確立した。そして延長としての外界は、自我の存在に比べて確実性の程度が劣るものとされた。

デカルトによる自我の存在証明に対する態度は、近代哲学において個々の哲学理論の性格を判定する上でのリトマス試験紙ともいえる。デカルトに続くどの近代哲学者もデカルト的コギトに対して根本的な態度表明を迫られないことはありえなかった。奇妙なことに、ヒュームによるデカルトのコギト批判がどのようなものであるのかは、これまであまり論じられてこなかった²⁾。しかし、ヒュームの外的物体論は他のどの哲学者によってなされたデカルト批判にも劣らない最も包括的なデカルト論なのである。こうした解釈が適切であると見なすための明らかな証拠をさしあたり二つあげることができる。一つは、ヒュームが外的物体論と同様の論拠によって自我の独立存在を否定し、同時に人間の存在を物体一般と同じ仕方で確立している点である。ヒュームの外的物体論は、彼の自我論と表裏一体をなしている。デカルトの自我論を知悉していたヒュームがその議論をデカルトと無関係に論じたとは考えられない。もう一つは、次節以降で論じるとおり、デカルトの私的世界に対するヒュームの公共的世界の樹立が、ヒューム外的物体論の固有の成果と見なされることである³⁾。

ヒュームの立場からデカルト的コギトがどのように批判されるかを考えてみよう。そのヒントはヒュームの発生論的な方法に見て取ることができる。ヒュームは、私たちの知識の最も根本的な所与を知覚に置く。そし

て、知覚の連合によって初めて意味と概念が生じ、次に対象の性質の認識が生じ、その後に初めて独立した対象が認識される。自我として意識される人間の存在も、独立した物体一般の成立を前提にして初めて可能なものである。それゆえ、ヒュームの立場が含意するデカルト批判は次のようなものとなるだろう。すなわち、自分がこれまで依存してきた世界についての理解をすべて懐疑の対象とした上で、明晰判明を真理の基準と断定し、それが精神の存在にのみ当てはまるとするデカルトのコギト論は、発生論的な順序を全くないがしろにするものであるがゆえに虚偽である。デカルトの理論は、彼の合理主義的前提を共有しない限り成り立たない。デカルトの懐疑を可能にしたものは彼を一人の人間として成り立たせている経験と社会と学問の総体である。それゆえ、デカルトの思惟する精神の存在は、確実な学問の基礎ではなく、彼以前の学問のすべてに付け加えられる新たな知見でありうるに過ぎない。

こうして、ヒュームはデカルトの議論の枠組みそのものを解体し、確実な認識という事態を人間的な意味において解明しようとするのである。デカルトは外的感覚の受動的強制や身体的感覚能力の外在性から精神の外なる物理的世界の实在を論証しようとした⁴⁾。デカルトが最も確実な存在として精神を確立する時点で、内的存在と外的存在の区別もなされている。デカルトの体系を経験論的な前提に立って書き換えようとしたロックも精神と物質の関係を、大筋においてデカルトと同様の仕方にとらえているといえる。しかし、デカルトは学問における真理の基準が明晰判明以外のものであってはならない理由を示しはしなかった⁵⁾。それは方法論的懐疑を彼自身の哲学の方法論と定めた時点ですでに前提とされていたのである。それゆえ、存在の認識の基準が明証性であるという前提そのものがどこから導かれるのかを示すことができるならば、デカルト哲学を根底から批判するだけではなく、それを包摂する哲学の樹立に通じるであろう。ヒュームの根本的な批判は、デカルトの議論が存在の概念を私たちにとって物が

あることの意味とかけ離れた形で提示している点に向けられる。ヒュームは、デカルトの前提そのものの由来を探究することにより「人間の科学」(science of man)の樹立を目指すのである。

2. 一般性の成立としての抽象観念論

前節においてヒュームの外的物体論と、その哲学史的背景としてのデカルトの理論との関係について論じた。本節と次節では、ヒュームの『人間的自然論』において外的物体論が論じられるに至る過程を考察し、その原理が知覚の一般性であることを論じたい。ヒュームの『人間的自然論』は三巻に分けられて出版されたが、一続きの論考であり、最も簡潔に述べるならば、その題名と副題に明記されているように、経験に基づく実験的な理論を道德の諸問題に導入することによって「人間的な自然」を解明しようとするものである⁶⁾。したがって『人間的な自然論』におけるヒュームの最も根本的な狙いは道德論にあると考えられる。哲学が細分化し、認識論と、心理学、道德論、政治論があたかも別々の主題であるかのように見なす今日の偏見を除いて見るならば、ヒュームはその言葉通り、『人間的な自然論』の全巻において「道德」の問題に取り組んでいるといえるのである。かつてケンプ・スミスは、ヒュームが『人間的な自然論』の執筆に取り掛かった最初の問題意識は、道德の問題にあったと正しく指摘した。ところがケンプ・スミスはその結論として、ヒュームが『人間的な自然論』を第三巻「道德について」から執筆し始めたと主張したのである⁷⁾。その後、ヒュームの伝記家モスナーの実証的研究によってヒュームが第三巻を最後に執筆したことが確定し、ケンプ・スミスの主張は誤りであることが判明した⁸⁾。私たちはむしろ、ヒュームの根本的な問題意識が道德論にあったからこそ、ヒュームは第一巻「知性について」と第二巻「情念について」を道德哲学として論じたのだと考えなければならない。こうした観点を取ることににより初めて、第一巻における知覚の理論の明快な筋道が浮かび上

がり、外的物体論を『人間的自然論』全体の構成の中で正しく位置づけるのである。

第一巻第一部「観念、その起源、複合、抽象、結合等について」において、ヒュームは印象と観念のみからなる原初的な知覚を彼の全理論体系の基礎にすえ、それらがいかにして一般性を獲得していくのかを、結合と関係の理論によって説明している。第一部の最終節においてロックの抽象観念論を批判する形でヒュームは抽象観念に独自の定義を与えている。ヒュームによれば、抽象観念はその本性においては個別的であるが、その代表の働きにおいては一般的であるとされる (T 1.1.7.6)。この抽象観念論によって、ヒュームによる最終的な観念の理解が示されている。ヒュームの抽象観念論は、『人間的自然論』において極めて重要な役割を果たす。なぜならば、それ以降論じられる空間、時間、原因、結果、信念、物体などの観念はどれも抽象観念だからである。ヒュームにおいては、「ソクラテス」などのいわゆる固有名詞も、「同一性」などのいわゆる抽象名詞もひとしく、適切な観念連合の習慣においてのみ意味を持つ抽象観念とされるのである。

こうして、知覚の単位としての最小で個別的な印象と観念から出発し、ヒュームの知識論は、抽象観念論によって私たちが持つ概念の説明にまでたどり着いた⁹⁾。デカルトが生得観念とし、またロックにおいても知性の産物とされた哲学的概念をヒュームは習慣の作用としてとらえなおしたのである。ヒュームはこの抽象観念論において、『人間的自然論』の方法論的原理として「観念連合」を提示したと見ることができる。個別観念は、その類似の観念との自然な連合によって初めて意味を持つ。そして観念の連合は対象的世界においてではなく、個別的な印象を抱く人間の精神の側において生じる。こうして世界に存在する対象の観念は、人間的なものとなり、精神における観念の連合と、世界の側にある客観的秩序の形成が同一の事態として生成する。これがヒュームにおける、自然的世界の人間化

の原理である。人間の精神が対象を理解する過程と、世界の側の秩序の生成を同一の事態とすることによって、ヒュームはデカルト的二元論を克服しようとするのである。ホッブズはデカルト的二元論を克服するために道徳的世界を物質の運動として説明したのに対し、ヒュームは物質的世界を人間的世界として一元的に説明しようとしたといえる。

ヒュームの外的物体論に通じる抽象観念論のもう一つの含意は、観念の一般性を成立させる視点のもつ規範性にある。すなわち、ある個別的な観念は、それに類似する他の観念との連合に置きいれられるとき、自然の働きに正しく従っていると見なされる。これが真なる観念の成立を意味する。逆に、ある個別的な観念が、それに類似する他の観念との連合に置きいれられず、それに類似しない他の観念との連合に置きいれられるならば、その観念は誤って認識されていることになる。たとえば、「塩」という個別的な白い砂粒状の物体が正しく認識されるのは、それが「砂糖」その他ではなく「塩」とされる他の個物と類似のもの、もしくはある仕方で代替可能なものと見なされることによる。物質の観念のみならず、「弱者」や「政府」等の観念が正しく認識されているかどうかの基準も同様に考えることができる。観念の連合は習慣の作用によって引き起こされ、主体的な選択によるものではない。ヒュームはそうした働きを「精神の魔術的な能力」(T 1.1.7.15)と呼んでいる。この能力は、人間的な自然の最も根本的な作用と見なすことができる。そしてこの作用の自然さが、私たちの認識の規範性に関係しているのである。

では習慣の作用が正しく働いたかどうかをどのようにして反省的に知ることができるのか。それは個別的な認識に対する知覚者の反応が、彼が認識したところの類似に基づいて、他の個別的対象に対して経験した事態と同様の結果をもたらすか否かによって知られる。こうして、個物の知覚において私たちは、人間にとっての規範性の最も根本的な次元を形成することになる。これがヒュームにおける認識論的規範の成立であり、その特徴

は、人間の恣意的な選択に先立つ事態として与えられ安定をもたらすこと、そしてその現れが、なじみがあるという意味で自然に見えるという点にある。さらにその認識に基づく行動の結果はその認識を共有する人々にとって把握可能で、概ね期待に沿うものと認められる。ここでいう規範は、そのままではいまだ狭義の道徳的規範を意味するものではないが、しかし、狭義の道徳的規範が人間の知覚に現れる事態と同様の仕方(manner)を有するものである。ヒュームにおいて認識論的規範と道徳的規範は連続的に理解される。これがヒュームの自然主義である。認識論的な次元で規範が成立しなければ、道徳的規範の発生論的な説明が成り立たず、道徳を人間的な事態として完結させることができない。こうしてヒュームの道徳論としての認識論は、神学的、自然法論的道徳論への批判を意味しているのである。

ヒュームの唯名論における習慣的連合としての一般観念論の重大な含意は、主体者の観点の成立という事態である。一般性は、対象の側に存在するものでも、知性の内に存在するものでもなく、個別的な観念を他の類似の観念との連合において見る主体の側の観点の形成に存する。このような観点は、個別的な観念をその一般性に置きいれる観点という意味で一般的観点と見なすことができる。逆に、ヒュームが後の議論において一般的観点を用いるとき、それは、こうした意味で理解されなければならない。ヒュームにおいて、一般的観点をとるとは、個別対象をそれと類似の他の個物との連合の中に置きいれ個物を正しく認識することである。こうして一般性の成立は規範の成立を意味するがゆえに、一般的観点は道徳的観点なのである。ヒュームの『人間的自然論』は、この規範性の追求を骨子とする理論ということができる。

3. 高次の一般性としての因果信念

前節でヒュームが一般的観念論において、印象と観念とからなる知覚か

ら概念が生成する仕方を提示していることを確認した。では一般観念に続く高次の一般性はどこに求められるであろうか。それを追求するのがヒュームの因果論である。私たちが世界を理解することの意味について、ヒュームはデカルトとは全く異なった見地に立っている。ヒュームの『人間的自然論』における関心が道德である限り、ヒュームの因果論も道德論と無関係ではありえない。私たちにとっての世界理解とは、道德的な振る舞いを可能にする信念を獲得することにほかならない。ヒュームにおける世界理解のモデルは、アリストテレス的観照でも、またデカルトの確実性でもない。人間の行動に必要な世界理解とは、ある状況もしくは対象の性質としての因果性を認識し、かつ信じることである。その意味において自然主義的立場からは、道德的行為といえども人間の行為一般と本質的に異なるものではない。ヒュームは、対象の性質についての私たちの理解が関係を中心にしたものでしかありえないと考える。つまり、ある対象の性質の理解は、その対象がそれに隣接する諸対象とどのような因果的関係を持つかの理解にほかならないとされるのである。

ヒュームの因果論はデカルトが外的世界論において前提にしている因果理解への批判でもある。「第六省察」においてデカルトは、感覚という受動的能力に対して、感覚的事物の観念を生み出す能動的能力が存在しなければならず、それを物的なものと考えなければならない、という外的物体の存在証明を行っている。この考えは、対象の性質はそれに内属する力能に存するとするロックの議論にも引き継がれている。それに対してヒュームの因果論は、外的物体を内的観念の原因とするデカルトの論法を根底から覆すものである。因果の知覚とは、二つの対象の恒常的連接から得られる心理的必然性に由来するものであり、観念と物体の間に因果関係を適用することは、因果概念の誤用である¹⁰⁾。そもそも因果関係が存在するという前提自体が、二つの物体の信念を前提にして初めて生じる信念なのであるから、因果関係に基づいて外的物体の存在を主張することは、二

重の仕方で因果概念を誤用することなのである。

周知のように、デカルトは外的物体の存在を最終的に絶対に確実な認識として提示することはできなかった¹¹⁾。そして外的物体についての私たちの知的な営みが無意味ではないことへの信頼を神の誠実さにゆだねるのである。デカルトの理論を経験論の土壌で再構築したともいえるロックも、外的存在の本質は不可知であり、デカルトと同様、感覚を介して知られるがゆえに確実ではないけれども、確信に値するものとしている¹²⁾。ヒュームはこうした議論の曖昧さをただそうとする。ヒュームはいう。

すべての印象は、外的なものであれ、内的なものであれ、情念であれ、感情であれ、苦であれ、快であれ、もともと同一資格のものである...それらは、すべてが、その真の姿で、印象として、すなわち知覚として現れる... 私たちの感覚能力が、私たちの印象の、性質においてというよりも、位置と関係とにおいて、より私たちを騙すことができるということは、考えられない。なぜなら、精神の作用と感覚とはすべて意識によって私たちに知られるのであるから、それらは、必然的に、すべての点で、それらがあるとおりのものとして現れ、また、現れるとおりのものとしてあるのでなければならぬからである。精神に入ってくるすべてのものは、現実(事実)において知覚であるので、何かを感じ(*feeling*)にとって違ったものに見えるということは、ありえない。そのようなことは、私たちが最も直接に意識しているところにおいてさえ、私たちが間違っているかもしれないと、仮定することである。(T 1.4.2.7)

ここにおいてヒュームは極端な懐疑論を退け、直接見ているものが何であるかは、議論の余地がないと主張している。これは、デカルトが明晰な観念と曖昧な観念を区別し、真理の基準を観念の明晰判明さに求めようとす

ることへの批判である。感覚による対象の知覚が、それ自体として確実性に欠けるとすることは偏見であり、外的存在の独立性が感覚によってとらえられないという事実は、感覚の信頼性とは別の問題であるとヒュームは考える。

それゆえヒュームにおいて何かが存在するとは、知覚が存在することを意味する。しかし、すべての知覚の対象が存在するとするならば、「机」も「痛み」も「自我」も「神」も「キメラ」もすべて存在するという点で同等であることになる。その際の問題点は私たちが通常想定する存在の仕方の差異が明確にならないことである。ヒュームのいう「普通人」は、机などの物体は「痛み」などとは異なった仕方で存在すると想定する。それゆえ、存在するということの私たちにとっての意味を明確にする必要があるのである。それをヒュームは知覚の様式に求めた。私たちが存在すると見なす対象の理解は、信念の理論の一部であることにより道徳理論との関連性を有する。ヒュームの信念論はそうした存在の様式についての議論と理解することができる。

私たちの対象についての認識は、個別的知覚を類似によって他の知覚に連合することによる一般観念の成立によって始まる。しかし、一般観念はそれ自体では個別的対象についての理解を表すものにとどまる。私たちが道徳的行為において必要とするのは個別的対象単独の理解にとどまらない多様な個物の関係の認識である。因果的信念は私たちに、ある個別的対象が、それ以外の他の個別的対象とどのようにかかわるのかについての理解を与えるのである。

こうして世界に存在する諸々の対象は、等しく知覚の対象でありながら、それぞれが他の対象と固有の因果的関係を持つとされることによって、人間の認識の世界において固有の位置を得ることになる。ヒューム因果論の意義は、原因概念を知覚の理論の中に取り入れたことである。デカルトにおいて原因は、結果によってのみ知覚される、結果以上のものとさ

れた。しかし結果としての知覚の原因が、本質的に知覚の対象以外のものであるとするならば、原因を知覚することなく、結果だけを知覚することになる。そのことは私たちの経験的世界から「原因」を追放することを意味する。私たちは事物が何の原因であるのかについての知覚に基づく信念を持つことなしには、どのような行動も起こすことができない。それゆえ原因が不可知であるということこそ私たちに最も大きな不安をもたらす事態であり、デカルトが求めてやまない確実な知識の端的な否定であることをヒュームは見て取ったのだといえる。それゆえ、原因は私たちの世界の内部に存在しなければならない。私たちが因果信念に依拠して日常生活を送っているという事実が、原因を結果以上のものとする理論は受け入れがたいと主張することの十分な理由である。こうしてヒュームは、デカルトが想定した観念と存在との間の因果関係を否定し、因果概念を観念と観念の関係に限定した。その理由はまさに、観念と、観念と種的に異なるものとしての物質との間の因果関係は私たちにとって無用であるからである (cf. T 1.4.2.47)。物質は私たちにとって物質の観念としてのみ存在する抽象観念である。この意味でヒュームの因果論は、デカルトの外的世界論批判のための布石であり、それに取って代わるヒューム自身の外的物体論を性格づける理論なのである。

ヒュームの因果律は知覚によって認識される。ヒュームの懐疑論が明確に示すように、結果と見なされる知覚の原因は、知覚される結果の端的な原因ではなく、私たちが原因と信じるものでしかない。すなわち原因の認識は知覚に依存するのである。それはいかなる知覚だといえるだろうか。先にヒュームの一般観念が一般的観念に基づくことを確認した。一般的観念をとるとは、個別的な対象をそれに類似の他の個別的な対象と同様なものと見なすことである。同様に、ヒュームの因果知覚もまた一般的観念に基づくものと理解することができる。厳密にただ一度限りの事例に適用される因果律は存在しない。宇宙に生じる事象は知覚の対象としてはどれも

ただ一度限りの出来事である。マールブランシュら機会原因論者が指摘したように、このことは因果律の存在の否定の根拠になる。しかし私たちにとって因果律は個別的な対象の知覚を、それに類似した対象と同様の結果を伴うものとして自然に知覚するという視点をとることにのみ存する。この意味で因果知覚は一般的観点によって成立する。観点の一般性の成立なしには、因果律の知覚は成り立たないのである。

一般的観点をとることは、意思疎通可能な公共的認識を得ることである。そうして因果知覚は、一般的観点によって成り立つことにより公共的認識として成立する¹³⁾。ヒュームにおいて公共的認識以外に道德の基礎となるものはない。しかしながら、ここで注意すべき点は、公共性として成立する規範的認識としての因果認識は、それ自体では世界の認識として完結しないことである。その理由は因果認識が絶えず変転し、安定した認識ではないという点にある。因果律は個別的な知覚に基づき、固定的事実として存在しないがゆえに、個別的に現れる知覚がすべて別々の因果性においてとらえられることになる。こうした事実は人間の道德的行為にとって極めて都合の悪い事態といわざるをえない。ヒュームが印象に対する信念の利点を説いた論拠(cf. T 1.3.10.2)を援用して述べるならば、その場合人間はめまぐるしく移り変わる一つ一つの因果性の印象の変化に振り回されて、安定した生活を送ることが全く不可能になるであろう。それゆえ、因果の印象は、それがなんらかの対象に属するものとして信じられなければならない。ヒュームは次のように述べている。

もっとも公正な哲学者たちによって認められているところでは、私たちが持つ物体の観念は、対象を構成し、たがいに恒常的な結合をしているのが見出されるいくつかの異なる感覚的性質の諸観念の、精神によって形成された集合にはかならない。これらの諸性質自体は、たがいに全く別個なものではあるが、私たちが通常、それ

らが構成する複合物を、「単一の」ものであり、非常に大きな変化にもかかわらず「同一の」ものであり続けると、見なしていることは、確かである。(T 1.4.3.2)

私たちは、対象を認識する際に、その性質の知覚を通して対象の認識に至るが、対象の存在の信念を持たないままに、あるものの性質としての因果知覚を保持することはできないのである。この理由から、因果論は、その性質の主体としての外的対象の理論を要請するのである。『人間的自然論』の理論展開を導く原理は発生論的方法である。それは後の議論が前の議論からの帰結として必然的に派生することを意味する。道徳を考察する際、私たちは通常道徳を完成した姿で思い浮かべる。しかし発生論的観点からは、道徳はそのままの形で自存するものとしてではなく、最もプリミティブな所与から生成するものとして理解されなければならない。私たちの通常の思考によれば、対象が存在するがゆえにその性質が認識されるとされる。しかしヒュームは対象の性質の認識が信念として確立するためには、対象の存在の信念がなければならないと考えた。ここにヒュームの外的物体論の根本的な特徴が見られる。外的物体論とは、印象と観念から出発した知覚が一般観念を形成し、そして一般観念が個々の個物相互の関係を表す因果信念として規範を生成させ、その規範が独立した対象の信念として確立する過程についての議論なのである。

4. 「存在」と「外的」存在

デカルトは精神としての「私の外にある物」(*res extra me existens*)の存在を問う(AT. VII 37-38)が、ヒュームは、私の外の存在という観念そのものが、物体の知覚の固有のあり方に由来すると考える。「感覚についての懷疑論について」の部分で、ヒュームは次のように述べている。

私たちはどのような原因が私たちをして物体の信念へと誘うのかと問うてもよい。しかし物体が存在するかどうかを問うことは無駄である。これは私たちのすべての推論において認められたものとしなければならない点である。(T 1.4.2.1)

この主張は、ヒュームの外的物体論を理解する上で極めて重要である。しかしまた多くの誤解にさらされてきた主張でもある。ヒュームは、この箇所では物体が私たちの信念を離れて実体として実在するという主張ではない。そのような解釈は『人間的自然論』全体の主張と齟齬するであろう¹⁴⁾。「問うことは無駄である」とは物体がそれ自体で存在するという意味ではなく、私たちにとって物体の存在は最も揺るぎない信念であるという事実を指摘するものである。ヒュームはデカルトの物体概念やその存在についての問題設定をそのまま受け入れた上で、デカルト的な物体の存在を当然としているわけではない。ヒュームの課題は、果たして物体や外界が存在するかどうかではなく（そのためには物体とは何かがあらかじめ明らかでなければならないであろう）、物体が存在することの人的自然に即した意義の解明である。その議論が可能であるために、私たちが物体の存在を事実として認めていることは、前提されなければならないのである。正確には、ヒュームは上において「外的物体」の存在を当然のこととして認めたのでもない。「物体」の存在と「外的」物体の存在とは別の事態である。ヒュームは物体存在の人的自然に即した意味を、物体が「外的」に存在すると信じる事態として解き明かそうとするのである。

ここでヒュームが外的物体と呼んでいるものがより具体的には何を意味するのかを確認しなければならない。第一に、ヒュームの外的物体論においてしばしば、「外的物体」と「外的世界」とは混同されたり、同一視されたりすることが多い¹⁵⁾。しかしヒュームの根本原則に即していうならば、外的世界に対応する印象を求めることは、外的物体に対応する印象を

求めることより一層困難である。外的世界がそれ自体として存在するためには、外的世界は個々の物体の集合であってはならず、そのためにデカルトはそれを「延長」として一括しなければならなかった。それに対してヒュームが議論の対象とするのは明確に、外的物体である。ヒュームにおいて外的世界は外的物体を通してのみ理解されるものである。第二にデカルトおよびロックとは異なり、ヒュームの想定する外的物体は、直接知覚の対象とされないものであってかつ知覚を生み出す原因となるという類のものではない。ヒュームは「私たちの知覚とは何か種的に異なるものと受け止められた外的な存在の観念に関しては、私たちはすでにそのばかばかしさを示しておいた。」(T 1.4.2.2)と述べている。すなわち、ヒュームは外的物体として理解される対象の素材は、知覚によって認識される性質そのものであると考え、それが物体の素材についての十分な理解であるとしているのである。この点にヒュームによるデカルトおよびロックの外界論に対する明確な批判が認められる。デカルトにおいて、外界とは精神以外の存在を意味する。それは端的に、「延長的事物」(*res extensa*)の存在である。しかしヒュームにおいて「物体」(*body*)の知覚と「物質」(*material*)の存在とは全く別の事柄である¹⁶⁾。物体は必ずしも物質から構成されるものである必要はない。物体とは独立の形をとった知覚の対象を意味するが、物質は対象の素材を意味する。ロックによれば外界とは、何であるか明確には知られないが私たちの外部に存在する「物」(*Things*)とされている(Essay 4.1.3)。ロックは外的な物の存在を確かと見なすが、その実在的本質については不可知であるとする。それゆえロックは対象の認識ではなく、対象の本質の知識を問題にしているといえる。

こうして外的物体論に関するデカルト的・ロック的な議論と、ヒュームの議論の方向性の違いが明らかになった。デカルト・ロックの課題は、精神および観念を内的存在として確実視した上で、その原因として想定される限りでの外的世界の本質の確実な知識を樹立することである。それに対

してヒュームの課題は、私たちがすでに認識している限りでの知覚の対象が、独立に存在するものと信じられるのは何故かを説明することである。

するとヒューム物体論の焦点は、一体「外的」とは何かをめぐる問題となる。デカルトにおいて外的存在とは、内的とされる精神と種的に異なる実体すなわち延長であった。しかしヒュームにおいては外的の基準として内的な存在を用いることはできない。またヒュームの外的存在は、身体の外にあるものでもない。なぜならば、身体そのものがすでに外的存在だからである。それゆえ、ヒュームの外的存在論は場所についての議論でもない。外的・内的の区別を場所であるとするならば、外的・内的の対称性によって同一の対象が視点の相違に応じて外的であると同時に内的にもなりうるからである¹⁷⁾。

ヒュームは、私たちの物体の外的存在の信念とは、知覚の対象の連続・独立な在り方を指すものとする。そして連続存在する対象は知覚されていないときにも存在するから、知覚に対して独立な存在であり、逆に独立存在する対象は連続して存在するものであるから両者は互いを含意する。ヒュームは、独立存在の信念は連続存在の信念から派生すると指摘する。知覚と区別される何らかのものが存在することを否定するという意味で、ヒュームの議論は懐疑論であり、「一般人」(vulgar)が当然と見なしている物質の存在の否定を意味する。一般人が物質と見なしているものは、実は連続性・独立性を付与された諸感覚の統一性の抽象観念にほかならないのである。しかし感覚の対象は定義からして本来連続でも独立でもありえないから、そのような存在の信念は虚構であるほかない。ヒュームは、いかにしてそのような虚構が成立するのかを解明しようとする。

こうしてヒュームは、外的物体は直接的な知覚ではなく、理論的に必然的な結論でもなく、想像力の産物であると結論する。そしてヒュームは、感覚の知覚がそのまま外的物体を表すという一般人の確信と、外的物体を理論的に要請できるとする哲学者の見解を共に否定する(T 1.4.2.14f.)。

ヒュームは想像力は次の四段階を経て物体の連続存在の信念に至ると考える (T 1.4.2.25-35)。第一の段階は、「個体化の原理」(*principium individuum*) と呼ばれる。この原理の中心となるのは「同一性」(identity) の概念である。同一性とは、単独の知覚が生み出すことのできる「単一性」(unity) と、多数の知覚が生み出すことのできる「複数性」(multiplicity) を両立させるための想像力の虚構である。知覚の理論に即していうならば、それは複数の知覚を一の対象と見なすという不合理を説明する概念である。第二段階は、断片的な中断した知覚を、それらが似ている場合、単純化を求める知覚の傾向によって同じものと扱う私たちの強い傾向である。第三段階は、同一性を付与した知覚の対象に、その同一性の知覚の不可避免的な中断から生じる矛盾と、それに伴う不安を打ち消すために、連続存在の虚構を付与することである。そして第四段階は、想像力の虚構である連続存在を、その観念の自然さのゆえに私たちが確かな事実として信じることである。

知覚の理論において対象が同一と見なされるとは、対象が類似であることの究極の事態を意味する。ヒュームの上の説明においてわけても中心的な役割を果たす「同一性」の概念は、個物をそれに類似の他の個物との連合において認識する習慣の働きとして示された抽象観念の最終形態と見なすことができる。それゆえ同一性とは、異なった類似の知覚を同じものと見なす視点としての一般的観点に存するものといえる。こうしてデカルトにおいて理性的に捉えられる「同一性」(*identitas*) の概念を知覚の理論の枠内で理解可能な概念へと書き換えることによって、ヒュームは外的物体の存在を経験の産物として説明するのである¹⁸⁾。

上において、一般観念および因果認識をもたらすのは、個別的な知覚相互の類似によって形成される習慣であることを確認した。その習慣の成立とは、知覚の対象に固有の性質ではなく、知覚の主体の側における一般的観点の成立を意味する。そして外界存在の認識も同様のメカニズムによっ

て成立すると考えられる。外的存在を認識するとは個別の知覚を、同一性を構成する類似の知覚の対象と見なす一般的観点から認識することにほかならない。

こうして外的物体の認識は、はじめに一般観念となり、次に因果知覚へと結実する知覚がさらに高度な一般性に向かって展開していく過程を完成させる。それが完成であるのは、外的物体が実際には想像力の虚構であるがゆえに、原理的にそれ以上の知覚の一般性はいないからである。こうして外的物体および外的物体が存在する領域としての外的世界は、堅固な客観性の外観を帯びる¹⁹⁾。私たちは想像力によってもたらされる独立存在としての外的物体から、確実性・絶対性・客観性の「感じ」を習得するのである。ヒュームにおいてこれらは真の信念の特徴とされるものである。ここにおいてヒュームのデカルト批判の核心が明らかにされたといえる。すなわち明晰判明な認識とは、独立な外的物体を認識するときに精神が感じる完成された知覚をモデルとしてそれと同様の感じをもって他の観念を知覚するという事態にはほかならない。デカルトにおける明晰判明の基準とは、知覚の事態に即していうならば実は確信の感じでしかない。そしてその確信の出所とは、習慣によってもたらされる外的物体の認識の経験なのであり、確信を存在の基準とすることは認識の順序からして本末転倒ともいうべき事柄なのである。そもそも「明晰判明」とは、視覚的なイメージを表すボキャブラリーである。そのゆえにデカルト自身が明瞭な認識を「精神の眼」(*acies*)で見ることと言っているのである²⁰⁾。ここで本稿の冒頭で指摘したヒュームによるデカルト批判の含意を確認するならば、デカルトのコギトの確信は彼を育んだ経験の産物であり、確実性の発生論的順序として自我の存在の確信は、物体の外在性の信念に類比的に主張されるものに過ぎない。確信とは万人のものであり、一人の哲学者によって初めて発見される真理の基準ではありえないのである²¹⁾。

5. 「私たちの内なる」世界と道德

前節までの議論によって、外的物体の認識が一般的観点の産物であることが明らかにされた。この節では、ヒュームの外的物体論の重大な道德哲学的含意が「私たちの世界」としての公共的世界の成立にあることを論じたい。先に確認したように一般的観点とは、何よりもまず意思疎通可能な認識を生み出す観点を意味する。それゆえ外的物体によって構成される世界は、人々のコミュニケーションによる公共的知覚によって成立する公共的世界と見なすことができる。公共的認識が外的物体を形成するというヒューム解釈の決定的な論拠は、ヒュームとロックの物体概念を対比することによって最も明確に浮かび上がる。ロックは外的事物について次のように述べている。

外からの観念を現実を受け取ることが私たちに他の事物の存在を覚知させ、私たちのうちに観念を生むある事物が、私たちにかかわりなく同時に存在すると知らせる。ただし、おそらくは、事物がどのようにして心に観念を生むかを私たちは知りもせず、考えもしないのである。(Essay 4.11.2)

ロックは物質的事物のことを「私たちにかかわりのない物」(Things without us)と呼んでいる²²⁾。それは決して単なる表現の上での問題ではない。ロックは、「私たち自身」の存在を直観によって知られるものとし、「神」の存在を論証によって知られるものとする。そして自然的実体の実在的本質は不可知であるとする(Essay 4.6.4)。その帰結としてロックは、「私たち」および「神」以外の存在としての「外的事物」が感覚によって知られる「私たちの外なる物」と言い表さざるをえなかったのである。こうした理論の道筋は、理性的存在者のみを道德的共同体の成員と見なす

ロックの道德論に符合する。それに対して、ヒュームは「存在の観念は、存在していると私たちが思い浮かべる対象の観念と、まさに同一である」(T 1.2.6.4)として知覚と存在を同一視する。この意味でヒュームにおいて存在の全体とは私たちの知覚の総体に等しい。このように理解するならば、ヒュームは、バークリが神の知覚とした存在概念の全体性を、人間の科学の樹立という根本的目標にふさわしく人間的領域に移し変えたということができる。ロックのように理性的推論や直観を真の認識とすることは、習慣や感じそして観念連合を中心とする人間的な自然の作用を全くないがしろにすることであり、それはヒュームがいうところの「偽の哲学」(T 1.3.14.27)にはかならないのである。

ヒュームはロックの議論を踏まえかつ同じ言語で論じながら、外的物体をロックと同じ言い回しで表現することは一度もない²³⁾。もちろん外的物体を延長と呼ぶこともない。ここにヒュームのデカルト、ロックへの明確な批判意識を読み取ることができる。ヒュームは外的物体を一貫して「私たちの知覚」の問題として論じ、外的物体が人間的な自然によって成立する想像力の産物であるとする(cf. T 1.4.2.51)。それは、外的物体を私たちの世界を構成する領域として人間的な自然の内側に位置づけることを意味する。外的物体は、認識の種類として他の知覚と異なるのでもなく、知覚と異なる場所に存在するものでも、論理的な要請でもなく、一般的知覚を想像力が固定化したものにほかならない。一般的観点において成立する知覚の秩序が公共的認識とともに、公共的世界を成立させるのである。

ヒュームは外的物体を、デカルトが示唆するような単なる延長としての物質でもなく、ロックが想定した「私たちがなしにある物」でもなく、その反対概念としての「私たちの内なるもの」として成立する知覚の秩序として提示したといえる²⁴⁾。外的物体を私たちの内なるものとして位置づけることによって初めて人間的な自然すなわち道德性の領域を正しく確定させることができる。「私たちの外なるもの」は人間的な自然の領域に存在せず、

それゆえ道徳的な認識たりえない。「私たち」に対応する単一の印象は存在しない。外的物体が成立しなければ、私たちの世界は存在しない。ヒュームは「私」とは移り変わる印象の束であるとする。それを敷衍していうならば「私たち」とは世界を構成する印象の総体であるということになる。『人間的自然論』第二巻においてヒュームは次のように述べる。

私たちというのは、他のあらゆる知覚から切り離されるならば、
実は無なのである。そして正にこの理由によって私たちは、私たちの
視点を外的諸物体に向けなければならないのである。そして私た
ちが、私たちに連続的に存在するようなもの、もしくは私たちに似
たものを最大の注意を持って考慮するのは自然なのである。
(T 2.2.2.17)

この言葉は十分な認識論的根拠に裏打ちされたものであると同時に、ヒュームが外的物体論を論じるにあたっての問題意識を明らかにしたものである。またヒュームは人間の精神を「共和国」(T 1.4.6.19)にたとえるが、そこには単なる比喩以上の意義が認められなければならない。こうしてバークリにおいて神によって知覚された領域として定められる世界の総体は、私たちの人間的自然の領域へと置き換えられる。一般的観点は対象の秩序を表す。外的存在とは私たちの存在のことであり、私たちが共にいるということは、秩序が存在することなのである。

外的物体論をそれに続く『人間的自然論』第二巻のシンパシー論、および第三巻の所有論へのつながりに注目して敷衍するならば、ここで「私」および「私たち」の「内」と「外」を基準として四つの領域を考えることができる²⁵⁾。私たちの内にして、私の内なるものが私的所有であり、私たちの内にして、私の外なるものが他者および他者の所有である²⁶⁾。私の内にして、私たちの外なるものが非道徳性の領域であり、私の外にして、私

たちの外なるものの存在をヒュームは懐疑の対象とし、人間の科学の範囲外のものとしたといえる²⁷⁾。ここで重要なことは、この領域の区分を定める視点である一般的観点自体が私たちのものであることである。外的物体の認識の重要性は「私たちの視点」のモデルを提供する点にある。そのことによって一般的観点は、「真の信念」の基準となるのである。

「外」なる物体が私たちの「内」に成立するという発想の転換は、道德とは何かについての発想の転換を伴うものである。ヒュームの良心論ともいえる「シンパシー」論において提示される道德的認識と公共的認識との関連も、外的物体論に基づいて理解されなければならない²⁸⁾。道德的理想がはじめに存在していて、それに従った世界が公共的に形成されるべきなのではなく、公共的世界の安定が道德的認識のモデルとなる。公共的世界には、性質を持った物体だけでなく、性格の表徴としての行為の主体である人間も含まれる。道德とは私たちを超えたものではなく、私たちの内なる事柄である。そして道德性の本質は、事態を公共的視点から認識し、それに応じた行動をとることに存する。こうして外的物体論に、『人間的自然論』第三巻における道德判断の概念である「一般的観点」の認識論的な根拠を読み取ることができる。それゆえ、外的物体論においてヒュームの規範性の理論の原型が完結するといえる。それは一般観念に始まり、因果律によって生成し、外的物体という虚構によって終結する。この規範の「虚構」性が私たちに、道德が私たちの人間的な現実を超えた「理想」であるとの「感じ」を引き起こすのである。こうしてヒュームは理性主義道德論を人間的事態に即して解き明かし、スコットランド啓蒙思想の土壤をととのえたのだといえよう。

6. 結 び

確実な認識の探求においてデカルトが目指したのは、すべての学問の基礎付けであった。しかしデカルトが確実な認識の基準とした精神の存在

は、自然的な存在としての人間を世界から孤立させ、道徳を確実な学問の外の領域へと追いやることにもなった。それに対してヒュームは、確かなものとは何かというデカルト的課題を引き継ぎ、道徳の主題の全領域を扱う人間の科学を打ち立てようとした。デカルトとヒュームは、存在の根拠をめぐる近代哲学の営みの両極を指し示している。ヒュームは確実な認識の人間的な意義を考察し、それを世界の秩序の信念と考えた。人間が全幅の信頼を持って自己の生存を託しうるものこそ、真の意味において確かなものである。それが道徳性の確立であることをヒュームは探求のはじめから洞察していたといえる。外的物体の存在こそ私たちにとって何よりもゆるぎないものである。ヒュームの独創性は、外的存在に対する私たちの信頼と、私たちの道徳に対する信頼が公共的認識という同様の原理に基づくことを見抜いた点にある。その原理が一般的観点である。『人間的自然論』第三巻において、一般的観点は、やはりその本質において想像力の構成物であるとされる「統治組織」への信頼へと結実する²⁹⁾。

私たちの目の前に広がる世界、それが私たちの外なるものではなく正当にも私たちの世界であること、すなわち人間的自然の領域であることを示すことこそヒューム外的物体論の眼目である。外的世界とは私たちの活動の一切がとり行われる舞台である。それを議論の対象として論じえない限り道徳についての包括的な理論はありえない。ヒュームは、自然の認識と道徳的認識とを一元的に論じる自然主義によって道徳を人間存在の全領域に関わるものとして提示した。道徳規範は、人間の自然認識と無関係に存在するのではない。自然的世界の認識は知覚に始まり、一般観念と因果信念を経て、外的物体の信念において完結する。自然的世界の認識の生成と、人間の規範的認識の習得は平衡関係にあるから、外的物体の認識は規範的認識一般の完成を意味する。それゆえ、『人間的自然論』全体の構想に即して、外的物体論は規範的認識の成立の一般理論として位置づけられる。ヒュームは自身の理論の妥当性への自信を、私たちの日常的な習慣に

結実する人間的事態に即しているという点に置いており³⁰⁾、それゆえヒューム解釈の正当性も同様にそれを基準にしてはならなければならない。ところがこれまでヒュームの外的物体論は懐疑論との関連において論じられることが多く、外的物体論と道德論の関連を指摘する議論は、これまでほとんど行われてこなかった。私が本稿で示したヒューム外的物体論の道德論的読解は、そうした潮流に抗してヒューム認識論の道德哲学的意義を解明しようとする試みである。

註

- 1) David Hume, *A Treatise of Human Nature*, David Fate Norton and Mary J. Norton (eds.), Oxford: Oxford University Press, 2000. 本邦においては『人性論』(大槻春彦訳)もしくは『人間本性論』(木曾好能訳)という訳語が定着している。しかし人間本性という訳語は、ホッブズ、マンデヴィルらの性悪説とシャフツベリ、ハチソンらの性善説(または道德感覚説)との間の論争に対するヒュームの批判的意図を表さないし、また本稿が主題とする外的物体の議論をそうした文脈における人間本性の問題とみるのは不自然である。それゆえ本稿では『人間的な自然論』とする。訳文は木曾好能訳に基づき適宜変更する。また原典テキストの参照はノートン版を用い、本文中に略号 T とともに、巻・部・節・段落の順で括弧内に番号を記す。
- 2) デカルトにおける真理の基準である「明晰判明」とヒュームの「一般的観点」の比較に関しては、cf. Naoki Yajima (拙稿), "Hume's General Point of View and Descartes' "Clear and Distinct" Perception", *Bulletin of Keiwa College* 15, 2006. 3.
- 3) もとよりこのことは、デカルトにおいて知の公共性が論じられないということではない。村上勝三『観念と存在』知泉書館, 2004, 第二部第三章参照のこと。
- 4) R. デカルト『省察』「第六省察」(AT. VII 71f.). 山田弘明『デカルト『省察』の研究』創文社, 1994, 第十一章を参照のこと。デカルトのテキストへの言及は C. Adam and P. Tannery (eds.), *Oeuvre de Descartes*, revised ed., 12 vols., Paris: Vrin/CNRS, 1964-76. 以下 AT と略記し、巻、頁数を示す。
- 5) これは真理と明晰判明な認識の関係をめぐる問題であり、デカルトを擁護し

- ようとする注釈者が超えなければならないハードルの一つである。Cf. e.g., Louis E. Loeb, “The Cartesian circle”, in *The Cambridge Companion to Descartes*, John Cottingham (ed.), 1992, pp. 200–235, 山田弘明『真理の形而上学』世界思想社, 2001, 第五章。
- 6) 『人間的自然論』の副題は「道德的主題 (moral subjects) に実験的方法を導入する試み」とされている。大槻訳も木曾訳も “moral” を「精神」と訳すが、本稿で論じるようにヒュームの着想は、因果や外物を道德の主題とした点にあると私は理解する。
 - 7) Norman Kemp Smith, *The Philosophy of David Hume*, London: Macmillan, 1964, p. vi.
 - 8) Ernest Campbell Mossner, *The Life of David Hume*, 2nd edn., Oxford: Clarendon Press, 1980, p. 74.
 - 9) ヒュームの抽象観念論と一般的観点の関係についての詳細な議論に関しては、拙稿「ヒュームにおける抽象観念論の意義」『イギリス哲学研究』第29号, 2006を参照のこと。
 - 10) それゆえヒュームの認識論を知覚の因果論とみなす議論は支持し得ない。
 - 11) 古賀祥二郎「デカルトにおける外界の存在証明」, 『思想』, No. 869, 1996. 11, 56–72 頁等を参照のこと。
 - 12) John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, P. H. Nidditch (ed.), Oxford: Clarendon Press, 1975. 以下 Essay と略記し, 続けて巻. 章. 節の順で番号を附す。
 - 13) ヒュームの因果論が, 公共的知覚であり, 規範の成立の一般理論であるという私の解釈については拙稿「ヒューム因果論と規範の生成」『倫理学年報』第55集, 2006を参照のこと。
 - 14) ヒュームの実在論的解釈については, cf. R. Rupert and K. A. Richman (eds.), *The New Hume Debate*, London: Routledge, 2000.
 - 15) 最近の研究においても例えば H. ヌーナンは, ヒュームの外的物体論を “The external world” として解説している。Cf. Harold W. Noonan, *Hume on Knowledge*, London: Routledge, 1999, Chapter 4. しかしヒュームの『人間的自然論』のテキストに “the external world” という言い回しは用いられない。
 - 16) ヒュームはデカルトの *corpus* を material things と解することなく body としてのみ論じる。その際ヒュームは「物体」と「人間」の両方の意味を重ね合わせて議論していると考えられる。この点に注目してヒュームの外的物体論を人権思想の自然主義的基礎づけとして読解する試みについては拙稿

「ヒューム外的物体論の道德哲学的意義」，イギリス哲学会関東部会第 75 回研究例会発表原稿，2005 年 6 月を参照のこと。

- 17) 「外的」に対応する単独の印象は存在しない。外的物体および外在性とは、ヒュームが知識論第一部の最終節において明らかにした「抽象観念」なのである。
- 18) デカルトの生得観念に対するロックの批判については，Essay 1.2.8 & 18 を参照のこと。
- 19) ヒュームの外的物体論が客観性の概念を生み出すことを私は上掲拙稿「ヒューム外的物体論の道德哲学的意義」において論じた。
- 20) 所雄章『デカルト『省察』訳解』岩波書店，2004，265 頁参照のこと。
- 21) デカルト研究者小林道夫氏はデカルトとの比較において次のようにヒュームを批判している。「ヒュームが，自らを道德哲学者であって自然哲学や解剖学にかかわるものでないと任じ，そのような学問の課題である感覚の吟味や印象の起源の問題には自分の議論では立ち入らないという。感覚によって印象が人間の心に与えられてあるとして，その印象から諸々の信念がどのように形成されるかということを観察によって記述するというのがヒューム自身の仕事であるというのである。したがって，デカルトにとっては物質的事物の存在証明において決定的な役割を果たす外的感覚や身体能力の吟味あるいは感覚的観念の起源の問題はある意味ではじめから棚上げされているわけである。」小林氏の理解は，デカルトから見たヒュームについての批判を代表するものと見なしえて興味深い。だがデカルトにおいても外的世界から感覚が発生する過程を解剖学的に解明しえているわけではない。ヒュームの課題は，感覚の原因を不可知のものに求める理論を批判し，物体を含む人間的事態の内部にとどまりながらそれがいかにして外部と内部を持つ秩序として成立するのかを論じることである。「ヒュームには知覚や印象の与えられ方を究明しようという動機がなく，したがってデカルトのように外的感覚の特質を究明して物質的事物の存在証明をもたらそうということにはならない」のではなく，知覚が与えられるものであるという信念の由来を外的物体の信念の成立を通して解明したのである。それはデカルトが推論の論拠とする能動性受動性という概念そのものが，外的物体の信念に由来するという主張を意味する。小林道夫，『デカルト哲学の体系』勁草書房，1995，293-301 頁参照のこと。
- 22) ただし『人間知性論』，第四卷第十一章において一度「私にかかわりのない物」(Things without me) という表現を用いている。
- 23) A. バイアーは，「感覚の懐疑論について」の節におけるヒュームの叙述が，

- We, our, us の多用によって特徴づけられることを指摘し、それらが単に “royal we” ではないことを示唆している。Cf. Annette C. Baier, *A Progress of Sentiments; Reflections on Hume's Treatise*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1991, p. 120. しかし、ヒュームにおいて外的物体がロック的な「私たち」の外の存在を指すものではないという私の理解はヒューム研究者によって共有されていない。J. ベネットが、ヒュームの「外的」を “outside us”, “external to us” と表現しているのは明らかな誤解の表れである。Cf. Jonathan Bennett, *Learning from Six Philosophers*, Oxford: Oxford University Press, Vol. 2, 2001, section 276, p. 286.
- 24) 物体論を秩序論ととらえる発想において、ヒュームはホッブズやスピノザと問題意識を共有しているといえる。
- 25) シンパシーが「自己」を創造するという指摘については、cf. Amelie Oksenberg Rorty, “Pride Produces The Idea of Self: Hume on Moral Agency”, *Australasian Journal of Philosophy*, vol. 68, no. 3, 1990, pp. 255–269.
- 26) こうしてヒュームの外的物体論は、ヒュームの所有論に対して重大な意義を有している。それに対してロックにおいては物体論と労働理論に基づく所有権論が分断されているといえよう。
- 27) カントは『純粋理性批判』において外的存在を「私たちの外なるもの」とも、「私の外なるもの」とも呼んでおり、それらを明確に区別していない。円谷裕二『経験と存在』東京大学出版会、2002、第一章・第二章、湯浅正彦『存在と自我』勁草書房、2003、第三章等を参照のこと。
- 28) ヒュームのシンパシー論と社会的認識の関連に関しては拙稿「シンパシー論の再検討」、小泉仰監修『西洋思想の日本的展開』慶應義塾大学出版会、2002を参照のこと。
- 29) Cf. Naoki Yajima (拙稿), “The General Point of View as the Normative and Unifying Concept in Hume's *Treatise*”, Ph.D. dissertation, The University of Edinburgh, 2005, Chapter 8.